

人物史学習を通した双方向の 国際理解教育の構築に向けて —主題学習「雨森芳洲と朝鮮通信使」—

加賀 大学

1 問題の所在—国際理解教育の現状

現在、多くの高等学校では教育目標や教育方針に「豊かな国際性の涵養」「国際人の育成」など国際理解教育の推進を掲げている。その具体的な取り組みとしては、英語力の向上に向けた授業改善や英語コミュニケーション力の育成など英語学習に関わるものが多い。その他の取り組みでは、海外修学旅行や姉妹校交流、留学生の積極的受け入れ及び海外留学の推進、外部講師による講演などがあげられるが、英語圏との交流に比重が置かれる傾向にあることもあって、外国語科教員に依存した形の単発的な学校行事の組み合わせとなっていることが多い印象を受ける。

生徒の国際理解意識の育成を図るには、第一に我が国の歴史や文化の正しい理解の上に、相手の国や地域の歴史、文化を理解し、互いの違いを尊重しあう双方向の異文化理解の態度を育てることが必要である。残念なことだが、海外留学を経験した生徒が我が国の歴史や文化、生活様式の由来や変遷などについて、現地で十分に説明しきれなかった例も多いと聞く。そこからは互いの違いを理解して尊重しあう双方向の異文化理解が、高校生の間に未だ定着していない現状がうかがえる。それは地歴科公民科の学習が国際理解に結びついていない、結びつきが弱いということにもつながる。まさに地歴科や公民科、とくに地理歴史科の学習の質が問われているわけであり、地理歴史科の幅広い学習活

動を通して、双方向の異文化理解を柱とする国際理解教育の推進に必要な歴史的思考力や表現力の育成が求められているといえよう。

2 人物史学習を通した双方向の国際理解意識の育成

我が国を取り巻く状況を歴史的な国際環境との関係のなかで正しく認識し理解しようとする姿勢は、これからの日本人にとって不可欠のものである。ここでは、双方向の国際理解意識の育成につなげる地理歴史科の学習について、日本史Bの主題学習を例に考察したい。

高等学校学習指導要領では、日本史Bにおいて、適切な主題を設定して探究し、考えを論述する活動を、通史的な学習内容とかわらせて実施することが求められている。主題学習には、既習事項を整理し活用することにより理解をさらに深めることができる点や、歴史を複数の視点から考察させる上で効果的であり、それによって歴史像をより総体的に構成することが可能になるなどの利点がある。

この試論では、時代の制約を受けつつも、他国や近隣地域との外交や交流の局面で互いの安定した関係の構築に尽した人物を取り上げることを通して、時代ごとの歴史的課題をより鮮明にイメージさせることが可能になると考え、人物史学習という手法を選択した。また、学習の主題としては、国際理解教育がとすれば英語学習と関連させた形での英語圏との交流や相互

理解に比重が置かれがちな現状を踏まえ、我が国と歴史的関係が極めて深い朝鮮半島との交流を対象とすることとした。具体的には対馬藩の藩儒である雨森芳洲を取り上げ、その人物像を通して江戸時代の朝鮮通信使による交流の実相について考察を深めることで、国際理解意識の育成につなげることをねらいとした。なお、雨森芳洲については、著書『交隣提醒』のなかで誠信の交わりを説いたことで知られ、諸外国との交流が限られていた江戸時代にあつて、政治、外交、経済、文化の広範囲にわたって深い認識を持ち、現在の国際関係にも資する視点を備えた人物として評価されていること、一部の中学校社会、高等学校日本史Bの教科書に簡略な記載があり、高等学校の図説等の副教材にも通信使との関連での記述があること、韓国の盧泰愚大統領（当時）の来日の際の演説でも触れられており、韓国の側から日朝関係史を考察する上でも一定の評価がなされる人物であることなどから、生徒にとって決して身近な人物ではないものの、江戸時代の日朝関係の歴史像を描かせる上で有効な教材足り得ると判断した。

3 年間指導計画への位置付け

国際理解意識を育成するための地理歴史科の取り組みとしては、まず教科の各科目の授業実践のなかで、幅広く国際理解につながる様々な学習を設定していくことが必要である。たとえば、各科目で年間指導計画に国際理解を主題とする探究型の学習を適切な形で設定する、授業のなかで学習項目に関連した国際問題等を取り上げたり、国際的な時事問題について時間を区切って生徒に発表させる、定期試験に必ず我が国との国際関係に関する設問を設けるなど各校の実情に合わせて計画的な実践を工夫し継続していくことが求められる。

主題学習の意義について、ここで確認しておきたい。今回の高等学校学習指導要領の改訂では、日本史Bにおいて、資料の活用により歴史

を考察したり、その結果を表現する技能を高め、歴史的な見方や考え方を身に付けさせることをねらいとして、「歴史と資料」「歴史の解釈」「歴史の説明」「歴史の論述」の項目が設けられた。このうち「歴史の論述」は、適切な主題を設定させ、資料を活用して探究し、考えを論述する活動を通して歴史的な見方や考え方を身に付けさせる学習として位置付けている。この学習項目は日本史Bのまとめとして位置付けているとしているが、科目のまとめ以外の形であっても言語活動を重視した主題学習を盛り込むことは、歴史的思考力と表現力の育成を図る上で極めて有益である。

雨森芳洲と朝鮮通信使を扱う主題学習の時期については、次の二つが考えられる。第一に、日本史Bの学習を一通り終えた時点で設定し、それぞれの時代の外交課題に対して我が国がどのように解決を図ってきたかという視点で、国際関係への関わり方の一例として雨森の対外的課題に対する認識の歴史的意義を考察させる案、第二に、大項目「近世の日本と世界」を終えた時点で設定し、幕府の外交秩序についての理解を深めさせ、日朝間の華夷秩序の認識の差異や対馬藩の置かれた状況下での雨森の対外的課題に対する認識の歴史的意義について、また朝鮮通信使の果たした歴史的役割などの理解につなげる案である。なお、山川出版社の教科書『詳説日本史B』では、学習項目の「歴史の説明」の題材としてとして「朝鮮通信使」が学習項目「幕藩体制の確立」の後に配置されている。各校の実情に合わせ様々な設定の時期が工夫できるが、ここでは第二案を採り、江戸時代の外交についての大局的な理解の上に、雨森の対外的課題に対する認識を考察させる人物史学習を通して国際理解意識の育成につなげることをねらいたい。

次に主題学習の時間数については、日本史Bの年間指導計画において全体の授業時間数との兼ね合いのなかで決定していくことになるが、標準単位数の4単位での履修の場合は2～3時

間程度が妥当といえよう。1時間での実施の場合は、四つの口体制の学習の直後もしくは正徳の政治の学習の直後に配置することも効果的であろう。

4 授業展開例

ここでは、2時間で実施する場合の授業展開例を提示したい。

(1) 1時間目

①学習目標

近世の日朝関係について朝鮮通信使を通して大局的に理解し、幕府、李氏朝鮮、対馬藩の3つの視点からそれぞれがなぜ日朝関係を必要としたか、東アジアの国際環境を踏まえて考察させる。

②学習のねらい

ア、文禄・慶長の役後の幕府による朝鮮通信使の修交復活について、当時の国際環境を踏まえて理解を深める。
イ、朝鮮通信使による修交及び雨森の対外的課題に対する認識を通して、対馬藩の外交課題を理解させ、雨森の果たした歴史的役割について考察する視点を整理する。

③学習活動

ア、四つの口体制など既習事項を整理活用し、幕府、李氏朝鮮、対馬藩の3つの視点から朝鮮通信使による修交が行われた背景を、当時の東アジアの国際環境とそれぞれの置かれた歴史的状況を通して考察する。
イ、雨森の主著『交隣提醒』を取り上げ、対馬藩の他藩にはない外交課題を考察する。対朝鮮貿易の比重の大きさから、日朝双方にとって通信使による修交関係が続いた理由を考察する。

雨森の対外的課題に対する認識から何を学ぶか、次時の班学習に向け探究主題を設定する。

【評価の観点】 思考・判断・表現
資料活用の技能

④指導上の留意点

ア、室町時代の日朝関係については既習事項の確認にとどめ、12回にわたる朝鮮通信使の概要については副教材の図説等を活用する。
イ、対馬藩の対朝鮮貿易の推移に着目させ、対馬藩の特殊な歴史的環境に気付かせる。釜山東萊府の門柱に「交隣」「鎮邊」と記されていることに触れ、朝鮮側の華夷秩序と外交姿勢を考察させる。

『交隣提醒』については抜粋をプリント配付しておく。

対馬藩の置かれた状況下での雨森の対外的課題に対する認識について考察する視点や、そこから何を学ぶかを考察する視点をいくつか例示して、次時で行う班学習の探究主題を4つ程度に絞り込む。

(2時間目)

①学習目標

対馬藩の置かれた状況下での雨森の対外的課題に対する認識についての考察を通して、朝鮮通信使が当時の国際環境のなかで果たした歴史的役割について、主題を設定して探究する。併せて現代の国際関係を理解する上で有用な視点を考察する。

②学習のねらい

ア、班単位の探究学習を通して、朝鮮通信使の果たした歴史的役割についての理解を深める。
イ、17C末から18C前半の日朝関係において雨森を含む当時の文化人の果たした歴史的役割などについて、新井白石や申維翰などを例に考察させる。

③学習活動

ア、班ごとに主題を設定し、既習事項に加え年表その他の資料等を活用して探究学習を行う。その際、当時の国際環境を踏まえ、世界的視野に立って考察する姿勢を徹底させる。
イ、各班から探究学習で考察した概要を発表させ、複数の視点から歴史を考察することで歴

史的事象への理解が深まり、歴史像を総体として再構成することができることを理解する。

ウ、探究学習を通して、ある歴史的事象から現代の様々な課題（ここでは国際関係にかかわる諸課題）を解決していくことの糸口を見出すことの意義を理解し、生徒一人ひとりの国際理解意識を高める。

【評価の観点】意欲・関心・態度

思考・判断・表現

知識・理解

④指導上の留意点

ア、探究学習の主題としては次のような例が考えられる。

- 幕府は朝鮮通信使による修交を通して、どのように支配体制の強化を図ったのだろうか。華夷秩序にも着目して考察しよう。
- 李氏朝鮮がなぜ幕府との修交に応じ、江戸時代を通じて朝鮮通信使による修交を続けたのか、当時の東アジアの国際環境に着目して考察しよう。
- 対馬藩は幕藩体制のなかでどのように外交課題の解決を図ろうとしたのか。対朝鮮貿易の推移に着目し、幕末から明治初期も視野に入れて考察しよう。
- 雨森芳洲に関する資料から、彼が対外的課題をどのようにとらえ、第8回と第9回の通信使にどのように関わったのか、また、日朝関係における雨森の果たした歴史的役割を考察しよう。
- 我が国を取り巻く国際環境のなかで、我が国は歴史上どのように外交課題の解決を図ってきたのか、世界史で学習したことも踏まえて考察しよう。

イ、発表は3班程度とし発表10分、質疑応答4分を目安とする。班員全員が学習成果を報告できるよう役割を分担するなど工夫させる。

ウ、探究学習後に探究レポートを提出させ、歴

史学習の成果だけでなく、生徒一人ひとりの国際理解意識の変容についても把握し、事後指導に活用する。

5 事後指導と発展的な学習に向けて

この人物史主題学習では、雨森の人物像を通して、雨森の対外的課題に対する認識や朝鮮通信使の果たした歴史的役割について、世界史的視野に立ち当時の国際環境と関連付けた考察を深め、歴史的思考力と国際理解意識の育成を図ることをねらいとした。この学習活動によって、生徒は、江戸時代の日朝関係が、好誼を通じつつ互いに牽制しあう緊張状態のなかで均衡と安定が保たれていたことを理解していく。そこから、室町時代から明治初期までの前後の時代を視野に入れて日朝関係の推移を考察する学習へ、さらに世界の中の日本という視点から我が国の歴史、文化の展開を総合的に考察する学習へと進んでいく。こうした学習の積み重ねを通して、双方向の異文化理解への意識が高まり、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質が養われていく。

事後指導にあたっては、地理歴史科及び日本史Bの目標に立ち戻って主題学習をまとめ、発展的な学習につなげていくことが求められる。まず、他の生徒の発表を自分の学習成果と重ね合わせることで、資料を適切に収集選択し、それらを活用して総合的に考察する力の育成を図りたい。また、主題学習から得た成果をレポートにまとめさせ、歴史的思考力や国際理解意識の一層の伸張につなげたい。日本史Bの学習では、考察したことを納得と理解を踏まえた自分自身の言葉で明確に表現できることが大切とされるが、考察したことを筋道立てて論述する力は双方向の異文化理解に欠かせない力である。主題学習の計画的な実践により、我が国の歴史の展開と伝統や文化の特色を、国際環境や地理的条件と関連付けて自分自身の言葉で自在に発信していける力を培いたい。こうした探究型の

主題学習は単発的、トピック的なものとせず通史学習や他科目の学習と組み合わせることで、身に付けた思考力、表現力が繰り返し活用され、さらなる伸長が期待できる。一つの工夫として、日本史Bの主題学習を総合的な学習の時間における横断的、総合的な学習課題として、卒業研究のような形で継承発展させていくことも考えられる。

拙い試論だが、日本史Bの主題学習の計画的、継続的な工夫改善と実践によって、双方向の異文化理解へ向かう態度が生徒の間で身に付き、相手との違いを認め合って関係性を築いていく国際理解意識がより確かなものになるよう期待したい。